様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２７３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００９７０

研究課題名（和文）19世紀中葉の東アジア情勢への日本の政治的反応

研究課題名（英文）Japanese political reaction to the East Asia situation of the middle in the 19th century

研究代表者
松尾　晋一（MATSUO, SHINICHI）

長崎県立大学・地域創造学部・教授

研究者番号：４０４５３２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀中葉に対馬から伝わった清・朝鮮情報が日本に流通していくメカニズムを解明し、その上で幕府・大名家による海外情報の受容と反応を史料から読み解き、「東アジア情勢」対「日本」の構図で日本の政治的反応の展開を検証することを目的とした。具体的には、アヘン戦争や太平天国の乱、アロー戦争の戦況に関する情報の日本国内流入と流通、これに対する日本側の政治的反応を検証した。その結果、従来の二国間関係で見えてこなかった幕府・大名家の情報受容と反応が確認でき、幕府は複数の情報入手ルートを持っていたので外交主体性の発揮を実現できた、といったことなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、従来の東アジア社会と日本との関係理解に見直しを迫り、日本の特質を明らかにするもので、日本史という枠組みだけはなく、アジア史研究史上においても意義ある研究だと言える。またここでの成果は、現在日本が抱える隣国との関係に有益な示唆を与えるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to first elucidate the mechanism by which Qing and Korean information transmitted from Tsushima in the mid-19th century circulated to Japan, then decipher the reception and reaction of overseas information by the shogunate and daimyo families from historical sources, and finally examine the development of Japan's political reaction from the composition of "East Asian situation" versus "Japan".
Specifically, I investigated the flow of information into Japan and its domestic circulation regarding the situation during the Opium Wars, the Taiping Rebellion, and the Arrow War, as well as Japan's political response to that information.As a result, it was possible to confirm the acceptance and reaction of information by the shogunate and daimyo families, which had not been visible in conventional bilateral relations, and it became clear that the shogunate was able to demonstrate diplomatic independence because it had multiple routes to obtain information.

研究分野：日本近世史

キーワード：19世紀　東アジア　日本　情報　政治　アヘン戦争　太平天国　アロー号

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

「鎖国」下において大陸情報や東アジアの情勢は、対馬、長崎、琉球、松前からそれぞれ日本に入ったものの、当然、時期や事象によって情報の量や質にそれぞれ違いがみられた。本研究で対象とする 19 世紀中葉は、ウエスタン・インパクトという言葉が象徴するように東アジア情勢が大きく変化した時代であり、様々なルートから情報が日本に伝わって、それらの情報が日本に強い影響を与えた。

東アジアの情勢変化への日本の対応を明らかにするには、その様々なルートからの情報を分析する必要がある。しかし、北京－朝鮮－対馬経由の海外情報については、2000 年代に保谷徹によって具体的研究蓄積が薄いと指摘されている（「解説」同編『幕末維新と情報』吉川弘文館、2001 年）。確かに当該期の東アジア情勢への日本の政治的反応について、ロシア問題、アヘン戦争、ペリー来航といった海外情報を対象に戦前から現代の藤田覚、岩下哲典、保谷徹などに至るまで多くの研究蓄積はある。けれどもそれらは、北京－朝鮮－対馬経由で日本に伝わった海外情報にほとんど触れていない。つまり従来の研究は、特定のルートの情報で 19 世紀中葉の時局を捉えてきたわけで、自ずと偏った結論が導き出されているところに検討の余地がある。

清の内政（太平天国の乱ほか）や朝鮮の対外的危機（英・仏・露船問題）など日本の周辺有事に関する情報に注目し、これらの情報が日本にもたらした影響を分析することで、東アジアの国際関係や社会基盤が揺らぐなかでの日本の政治的反応を、より正確に把握できることは明らかであろう。

２．研究の目的

本研究の目的は、従来注目されなかった清・朝鮮が直面した課題など北京－朝鮮－対馬経由で日本に伝わった海外情報を踏まえて、従来の「欧米」対「日本」の構図ではなく「東アジア情勢」対「日本」の構図で、19 世紀中葉の揺らぐ東アジア情勢への日本の政治的反応の展開を読み解き、開国・開港前後の海外情報流通事情の変化を踏まえて幕府の外交主体性を検証することにある。

３．研究の方法

(1) 19 世紀の対馬宗家による諜報活動の実像解明

かつてロナルド・トビ氏は、1678 年以後、北京－朝鮮－対馬経由で日本に伝わった海外情報は不完全で不正確であり、幕府に受理されることさえますます困難になり、朝鮮の情報のルートに欠陥があったのかもしれないとみて、ここから幕府が海外情報の真偽を区別する能力があったとの理解を示した（『近世日本の国家形成と外交』創文社、1990 年）。この指摘はその後の日朝関係史に大きな影響を与え、1678 年以後の北京－朝鮮－対馬経由で日本へ伝わった海外情報に関する研究の進展が

今日に至るまでみられなかった。

これに対して申請者は、宗家が真偽に関わらず日本にとって必要と思われる情報を幕府の老中へ伝達していたこと、そして従来海外情報を研究する上で用いられた「華夷変態」に、幕府が入手した情報すべてが採録されていないことをつきとめ、この編纂を行った林家に 19 世紀前半まですべての海外情報が伝えられていたわけではないことを解明した。 その後の状況の分析は未着手であり、本研究ではまず、19 世紀中葉の状況を宗家文書や朝鮮御用老中関係史料などの分析を通じて、宗家の海外情報収集のあり方や幕府への情報伝達といった諜報活動の復元を試みる。その上で、対馬宗家が担った日朝外交のなかでの海外情報取り扱いの特質を明らかにする。

(2) 北京－朝鮮－対馬経由の海外情報の質－他ルートからの海外情報との比較分析－

つぎに（1）の成果と日本の開国・開港（横浜・箱館など）の動きを踏まえて、朝鮮の対英・露・仏船問題、アヘン戦争、太平天国の乱、アロー戦争に関する情報に注目する。

日本史分野では、幕府の対露・英・米船問題、琉球の対仏・英・米・露船問題を取り扱った研究が数多くある。しかし朝鮮の対英・露・仏船問題は、まったく取り上げられてこなかった。アヘン戦争・アロー戦争については、北京－朝鮮－対馬ルートからの情報が踏まえられず議論されてきた。太平天国の乱に至っては、琉球への情報伝来の研究が若干あるものの、日本の対外関係の分析で取り上げられることがなかった。

そこで（1）の成果を踏まえて、トピックスごとに対馬からの海外情報を他ルートから日本に伝わった海外情報と比較する。具体的には、収集した文書などを用いて、伝来時期、入手情報の内容などを比較分析して、情報入手ルートの特質を確認し（開港地を含む)、大陸－日本間での情報伝播のメカニズムを解明する準備作業を行う。

(3) 海外情報の日本国内への伝播

国内各地にもたらされた海外情報は、幕府へ伝えられたが、その過程で、もしくは幕府から大名家に伝わった。これは大名家文書などに残る「風説書」（海外情報の記録）で確認できる。海外情報の大名家への伝来、そしてその影響は、国元の地理的条件や問題意識などを要因に異なるが、各大名家に残る「風説書」などを収集し、情報源や伝来時期、内容の傾向を分析して、為政者層における海外情報の伝播状況を把握する。また、海外情報入手ルート別の情報評価を抽出して、それぞれの特質を分析する。

(4) 当該期の東アジアにおける情報流通事情と日本の政治的反応

（1）～（3）の作業で得られた成果をもとに、従来注目されなかった北京－朝鮮－対馬経由で入った海外情報を踏まえて、幕府や大名家の対外政策を検証して政治的反応を読み解き、そしてウエスタン・インパクトや清国内の内部矛盾の外部への表出などを要因とした揺らぐ東アジア情勢と日本との関係を理論的観点から再評価する。また、開国・開港後の国内における海外情報流通事情の変化のなかで、幕府の外交主体性に変化が見られたのか、対外政策決定過程と海外情報との関係から検証する。

４．研究成果

対馬宗家は朝鮮・清情報について受け身だったわけではなく、必要に応じて収集活動を積極的に行った。そして、得られた情報を選択して江戸へ伝えたが、幕府はすべての情報に反応したわけではなく、必要に応じて情報の確認、収集に取り組んだ。つまり別ルートからの情報に期待した。長崎はオランダ・唐船からの情報のほか、対馬・薩摩、そして国内に漂着した船からも情報を得た情報集積地であり、当然幕府は長崎から上がってくる情報にもっとも期待していた。ただ、「東アジア情勢」対「日本」の構図で日本の政治的反応を考えた場合、幕府にしても、大名家にしても偏りのある情報か、複数のチャンネルがあることで自らが得た情報を検証できる環境にはあり、それを認識して動いた。開国・開港後の国内における海外情報流通事情の変化が実際起きたことは間違いないが、幕府の外交主体性を損なうことはなかったのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松尾晋一	４．巻 16
２．論文標題 太平天国の戦況と長崎－唐人たちの苦難－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東アジア評論	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松尾晋一	４．巻 874
２．論文標題 書評 上白石実著『十九世紀日本の対外関係 ： 開国という幻想の克服』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 83－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松尾晋一	４．巻 55
２．論文標題 フェートン号事件と長崎警備の見直し	５．発行年 2021年
３．雑誌名 長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松尾晋一	４．巻 14
２．論文標題 「日本人漂流民送還と外交文書」の補足 ―「皇賞」の銀牌と「長崎鎮府之印」―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『東アジア評論』	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松尾晋一	4．巻 79
2．論文標題 近世日本と「唐兵乱」ー太平天国進軍の衝撃ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 長崎県地方史だより	6．最初と最後の頁 1‐2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松尾晋一	4．巻 63
2．論文標題 幕藩制の揺らぎと長崎	5．発行年 2020年
3．雑誌名 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門「九州文化史研究所紀要」	6．最初と最後の頁 43－71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松尾晋一	4．巻 4
2．論文標題 日本人漂流民送還と外交文書	5．発行年 2020年
3．雑誌名 長崎市長崎学研究所紀要	6．最初と最後の頁 109－119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松尾晋一	4．巻 11
2．論文標題 アヘン戦争情報と幕府対外政策	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東アジア評論	6．最初と最後の頁 57‐67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　9件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 松尾晋一
2．発表標題 江戸時代における未知の島への探検と長崎
3．学会等名 長崎市長崎学研究所公開学習会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 松尾晋一
2．発表標題 長崎県域の歴史的特質
3．学会等名 JICA九州　地域理解プログラム「海外に開かれた長崎:過去・現在・未来」（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 松尾晋一
2．発表標題 多様性を受け入れ重んじた長崎県域の文化的背景
3．学会等名 JICA九州　地域理解プログラム「海外に開かれた長崎:過去・現在・未来」（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 松尾晋一
2．発表標題 フェートン号事件と長崎警備の見直し
3．学会等名 佐賀城本丸歴史館　第199回　歴史館ゼミナール（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 松尾晋一
２．発表標題 長崎奉行の外交文書
３．学会等名 長崎歴史文化博物館　長崎学スタンダード講座（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 松尾晋一
２．発表標題 日本と「唐兵乱」－太平天国進軍の衝撃－
３．学会等名 長崎県地方史研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松尾晋一
２．発表標題 薩英戦争と長崎
３．学会等名 第2回長崎学ネットワーク会議公開学習会（長崎市長崎学研究所）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松尾晋一
２．発表標題 列強との緊張と長崎
３．学会等名 大阪朝日カルチャー（長崎県文化振興課）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松尾晋一
２．発表標題 外交の最前線であった長崎が果たした役割
３．学会等名 平成30年度長崎県地域医療介護総合確保基金事業補助金「看護師等県内就業定着促進事業」講演会（長崎大学生命科学域）（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 中野等編	４．発行年 2024年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 384
３．書名 中近世九州・西国史研究	

１．著者名 新修宗像市史編集委員会編集	４．発行年 2022年
２．出版社 宗像市	５．総ページ数 706
３．書名 新修宗像市史　いくさと人びと	

１．著者名 新修宗像市史編集委員会編集	４．発行年 2022年
２．出版社 宗像市	５．総ページ数 479
３．書名 新修宗像市史　海の道・陸の道	

１．著者名 福田千鶴、藤實久美子、村和明、西村慎太郎、石津裕之、井上智勝、引津亨輔、林晃弘、山本英貴、宮本裕次、花岡公貴、越坂裕太、来見田博基、伊藤昭弘、兼平賢治、柳谷慶子、松尾晋一、武井協三、荒木裕行、モリス、J.F.、武井弘一、岸野俊彦、野口朋隆、高野信治、渡辺浩一、山本太郎、青柳周一、江藤彰彦、太田尚宏、梶嶋政司、岩淵令治	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 488
３．書名 近世日記の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

JICA九州　地域理解プログラム「海外に開かれた長崎:過去・現在・未来」
https://sun.ac.jp/pages/30188/detail=1/b_id=35946/r_id=1552#block35946-1552
長崎県立大学　研究情報
http://sun.ac.jp/researchinfo/matsuo/
J-GLOBAL
https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=201201037853137582&rel=1#%7B%22category%22%3A%220%22%2C%22keyword%22%3A%22%E6%9D%BE%E5%B0%BE%E6%99%8B%E4%B8%80%22%7D
researchmap
https://researchmap.jp/shin1ma2o

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関